國學院大學学術情報リポジトリ

『源氏物語』「ほどなく明く」考：時間表現論として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): ほどなく明く, 時間表現, 源氏物語, 省筆, 後朝 キーワード (En): 作成者: 吉海, 直人, Yoshikai, Naoto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000154

『源氏物語』「ほどなく明く」考
―時間表現論として―

吉海直人

はじめに

最近、『『源氏物語』の時間表現』（新典社選書・令和４年）を上梓した。これは時間表現論をリードしておられる小林賢章氏の一連の「アカツキ」論[1]から刺激と示唆を受けて、それを私なりに『源氏物語』の読解、特に「後朝の別れ」の分析に援用させていただいたものである。

小林氏は、動詞「明く」が日付変更時点である午前三時を過ぎることだという持論を展開しておられるが、それを強調するあまりに、やや強引に「明く」を午前三時（翌日）になる意で解釈すべきだと提唱されている。しかしながら「明く」には、一般的な「夜が明ける」の意で用いられている例も少なくない。そこで私は慎重に、「明く」には夜が明けるという意味と翌日になるという二つの意味が存することを前提として、そのどちらの意味かを文脈からきちんと判断すべきだと提案した（妥協案）。もちろん重視しているのは、小林氏と同じく日付変更時点の方である。

その「明く」の延長線上というかバリエーションとして、「ほのぼのと明く」があるので、前述の著書で私なりに論じてみた。

それ以外にもう一つ「ほどなく明く」という表現がある。これは「間もなく明ける、明けるまでにあまり時間がない」という意味である。これに関しても、前述の著書の第十二章「『源氏物語』賢木巻における朧月夜との「暁の別れ」」の注（2）に次のようにコメントしておいた。

「ほどなく明け」表現は、『うつほ物語』内侍のかみ巻に「ほどなく明くる暁」（167頁）とあり、『落窪物語』に「ほどなく明けぬれば」（80頁）とある。『源氏物語』では賢木巻に「ほどなく明けゆく」（105頁）、総角巻に「まどろむほどなく明かしたまふ」（335頁）、宿木巻に「ほどなく明けぬ」（406頁）と用いられていた。以後も『浜松中納言物語』に「ほどなく明けぬる」（70頁）、『夜の寝覚』に「程なく明けぬ」（32頁）・「ほどなく明けぬるなめり」（317頁）、『とりかへばや物語』に「ほどなく明けぬる心地」（494頁）、そして『とはずがたり』にも「ほどなく明けゆけば」（362頁）・「ほどなく明けゆく」（460頁）と用いられており、共寝のキーワードとして機能していることがわかる。その他、「ほどもなく明けぬる心地」（総角巻254頁）、「ほどもなう明け」（東屋巻93頁）や和歌にも「夏の夜の月はほどなく明けぬれば」（『後撰集』二〇六番）と詠じられている。小林賢章氏「『浜松中納言物語』の時間表現」同志社女子大学学術研究年報65・平成26年12月参照。小林氏は「ほどなく明く」の用例4例を検討され、

「ほどなく明く」という表現は、当然、明けるまでの時間が短いことを意味するが、その理由は、好ましい出会いやよい出来事によって、時間を短く感じる場合に使われているようである。（85頁）

と結論づけておられる。

ここまで問題を認識し、用例についても調べているのだから、これを発展させて一本の論文としてまとめてみることにした次第である。

一、問題提起

精力的に「明く」を論じておられる小林氏であるから、「ほどなく明く」にも注目されないはずはなかった。前章に引用した注（2）でも触れているように、この表現に関する御論も既に発表されている。[2] その論で小林氏は、『浜松中納言物語』巻一の用例を中心に、『和泉式部続集』一八二番詞書・『源氏物語』

宿木巻・『とりかへばや物語』の三例の検討を行われ、そこから、

「ほどなく明く」という表現は、当然、明けるまでの時間が短いことを意味するが、その理由は、好ましい出会いやよい出来事によって、時間を短く感じる場合に使われているようである。（85頁）

と結論づけておられる（主体は男性である）。その結論には賛成である。しかしながらわずか四例だけの検討というのでは、あまりにも分母が少なすぎるのではないだろうか。場合によってはたった一例の用例で論証できるケースもあるが、『源氏物語』はそんなに単純ではないので、とりあえず「ほどなく明く」の用例すべてに当たってみた方がよさそうだ。

そこで和歌の用例を見ると、単に早く明けてしまったという用例も少なからず認められた。それだけでなく、仮に二人の逢瀬が好ましいものであれば、当然別れは辛くなるだろうし、また逢いたいと願うはずである。とすれば飽き足らない、別れたくないという感情によって、時間が短く感じられるといい換えることもできるのではないだろうか。

特に小林氏が引用されている『源氏物語』宿木巻の例は、必ずしも単純ではなかった。本文を詳しく分析すると、「好ましい出会いやよい出来事」として片づけられる例ではないからである。ということで、小林氏の問題提起を尊重（継承）しつつ、もっと多くの用例（特に『源氏物語』の用例）にあたって再検討してみることにした。[3] 結果的に『源氏物語』の用例には、小林説に反するというか当てはまらないものが見つかった。『源氏物語』だけでなく、他の作品の用例の中にも、小林説とは別の解釈ができるものがあったことを報告しておく。

用例の検討の前に、手続きとして辞書の説明に耳を傾けておこう。私がよく引用する三省堂の『全訳読解古語辞典第四版』で「ほどなし」を見ると、意味・用法が、

1、広さがない。狭い。小さい。
2、距離が近い。遠くない。
3、高さがない。低い。
4、時間が経っていない。間がない。若い。

の四つに分類されていた。ここではこの中の4が該当することになる。時間にかかわる「ほどなし」は四番目に位置付けられているので、古語辞典ではたいして重要視されていないことが察せられる。また時間の説明の中に「若い」とあることには違和感を覚える。さらにいえば、4に引用されている用例は『徒然草』三〇段の「そもまたほどなくうせて」であった。もちろん「ほどなく失す」も死に至る常套表現として、『大鏡』や『栄

花物語』などに広く用いられているものである。しかしながら肝心の逢瀬にかかわる例が古語辞典では吸い上げられていなかった。

ついでながら、辞書においては「ほどなく明く」の例は立項されておらず、慣用語としても意識されていないことがうかがえた。もともと「ほどなく明く」は「ほどなく」（副詞）と「明く」（動詞）が結びついたものである。「ほどなく」については、国語学では副詞の用法が論じられている。また「明く」については小林賢章氏の一連の研究が蓄積されている。しかしながら二つが合体した「ほどなく明く」になると、そういったタイトルの論文も見当たらない。「ほどなく明く」は、平安時代の作品に広く用いられているにもかかわらず、これまで看過されてきたようである。その意味でも、小林論はその嚆矢ということになる。

二、「ほどなく明く」の用例

前に「もっと多くの用例にあたって」と小林論に注文を付けたので、あらためて用例を調べてみたところ、以下のようになった。初出は『後撰集』の二例のようである（『万葉集』及び『古今集』には見当たらない）。和歌関係に用例の半分があるので、「ほどなく明く」は歌語的表現といってもよさそうだ（わずかながら詞書の例もある）。

その内訳を示すと、和歌関係の用例十六例は以下のようになる。

後撰集　2例
①「夏の夜の月はほどなく明けぬれば」（二〇六番）
②「ほどなく明け侍りにければまかりかへりて」（九九六番詞書）

和泉式部続集　1例
③「ほどなく明けぬれば」（一八二番詞書）

為仲集　1例
④「いつのまにほどなく明けし夏の夜のねざめせらるる秋になるらん」（二〇番）

右兵衛督家歌合　1例
⑤「夢にだに恋しき人を見るべきにほどなく明くる夏の空かな」（二二番）

俊忠歌合　1例
⑥「夏の夜はほどなく明くるあまのとをなにとてたたくくひなるらん」（一五番）

基俊集　1例
⑦「はじめて女にまかりあひてな

つのよほどなく明けてからすのなき侍りしかば」（一三八番）

月詣和歌集　2例

⑧「月はなほ山のはとほく残れどもほどなく明くる夜こそ惜しけれ」（四五二番）

⑨「月こよひ秋にかはらず同じくはほどなく明けぬ山のはもがな」（四五五番）

六百番歌合　1例

⑩「夏の夜はたたくくひなのひまなさにほどなく明くるあまのとなれや（二三二番）

山家集　1例

⑪「夏の夜はしののこだけのふしちかみそそやほどなく明くるなりけり」（二四〇番）

式子内親王集　1例

⑫「夏の夜はやがてかたぶく三日月の見るほどもなく明くる山の端（三〇番）」

秋篠月清集　1例

⑬「うかび舟くだすかはせのみなれざをさしもほどなく明くるよはかな」（九一五番）

後鳥羽院御集　1例

⑭「七夕にけさかすいとのうちはへてよるもほどなく明くる秋かぜ」（五三九番）

万代和歌集　1例

⑮「過ぎにける春を惜しめばあやにくにほどなく明くるけふのそらかな」（四九四番）

林葉集　1例

⑯「天の戸を夜半のくひなやたたくらんほどなく明くる夏のしののめ」（二八三番）

十六例といっても、十四の作品に十六例であるから、必ずしも多用されているとはいえそうもない。次に散文（物語や日記）の用例十六例は次のようになっている（もちろん和歌も含まれる）。

うつほ物語　1例

⑰「短き夜のほどなく明くる暁に」（内侍のかみ巻167頁）

落窪物語　1例

⑱「御とのごもりぬ。ほどなく明けぬれば」（80頁）

源氏物語　6例

⑲「ほどなく明けゆけば、心あわたたし。」（花宴巻357頁）

⑳「ほどなく明けゆくにやとおぼ

ゆるに」（賢木巻105頁）

㉑「ほどもなく明けぬる心地して」（総角巻254頁）

㉒「まどろむほどなく明かしたまふに」（総角巻335頁）

㉓「更けにしかばにや、ほどなく明けぬ」（宿木巻406頁）

㉔「ほどもなう明けぬる心地するに」（東屋巻93頁）

浜松中納言物語　2例

㉕「ほどなく明けぬる心地するに」（70頁）

㉖「まもりあつかはせ給ふ。ほどなく明けゆく」（423頁）

夜の寝覚　2例

㉗「程なく明けぬべき夜も口惜しく」（32頁）

㉘「春の夜の短さは、ほどなく明けぬるなめり」（317頁）

とりかへばや　1例

㉙「更けにける夜の名残、ほどなく明けぬる心地」（494頁）

とはずがたり　2例

㉚「短夜はほどなく明けゆけば」（362頁）

㉛「寝ぬに明けゆく短夜は、ほどなく明けゆく空」（460頁）

小夜衣　1例

㉜「夏の夜なればほどなく明けぬれば」（中世王朝物語全集940頁）

こちらも同じく十六例だが、八作品中の十六例である。総計すると、「ほどなく明く」の用例は三十二例見つかった（『源氏物語』の六例がもっとも多い）。これを「後朝の別れ」に関わるものと関わらないものに分けると、小林説は前者を対象としていることになる。そこで本論でも「後朝の別れ」に関わる用例を中心に検討してみたい。

三、和歌の用例検討

まずは和歌の例として最も古い『後撰集』の二例から検討してみよう。なお和歌の引用は『新編国歌大観』に依る。

・夏の夜の月はほどなく明けぬれば朝（あした）の間をぞかこちよせつる　（二〇六番）

みづからまできて、よもすがら物いひ侍りけるに、ほど

なくあけ侍りにければまかりかへりて　読み人知らず

・うき世とは思ふものからあまのとのあくるはつらき物にぞ有ける　（九九六番）

「夏の夜の」歌は「月」が明けるのではなく、「夏の夜」があっという間に明けるという意味である。この場合、午前三時を過ぎても辺りは真っ暗なので、明けたからといって「月」に変化があるとは思えない。有明の月であれば、夜空に照っているはずである。これを夜が明ける意にすると、太陽の光によって月は光を失ってしまうことになる。

この歌を踏まえている、あるいは同趣向と思われるものが、『月詣和歌集』に、

夏夜暁月といふことを　道円法師

・月は猶山のはとほく残れどもほどなく明くる夜こそ惜しけれ　（四五二番）

賀茂資保

・月こよひ秋にかはらず同じくはほどなく明けぬ山のはもがな　（四五五番）

と出ている。「夏の夜」がもっとも短いのであるから、「ほどなく明く」の用例が集中するのも当然であろう。「夏の夜」の用例は他にも、

秋の夜を題にて

・いつのまにほどなく明けし夏の夜のねざめせらるる秋になるらん　（為仲集一〇番）

はじめて女にまかりあひて、夏の夜ほどなく明けてからすのなき侍りしかば

・君があるよあけもはてぬにあくべしやいでさがにくきこもり烏よ　（基俊集一三八番）

かへし

・人をいたふけしきの空にしるけれどまだき明けぬと鳴くからすをや　（同一三九番）

・夏の夜はしののこたけのふしちかみそよやほどなく明くるなりけり　（山家集二四〇番）

などが見つかった。そのバリエーションとして、

夏の夜はやがてかたぶく三日月の見るほどもなく明くる山の端　（式子内親王集三〇番）

もあげておきたい。「夏の夜」とあることで、従来はこれを安易に夜が明けて明るくなると解釈していたようである。しかしながらこれを日付変更の「明く」ととれば、定時法の午前三時は夏でも真っ暗である。再度「明く」に二つの意味があることを喚起しておきたい。またこの歌は、「ほどもなく明く」と「見

るほどもなく」が重ねられている。

この中で『基俊集』は詞書であるが、「はじめて女にまかりあひて」とあるのだから、「後朝の別れ」の歌ということになる。そうすると「からす」の鳴き声は鶏と同じく「後朝の別れ」を促す（別れの時を告げる）ものであろう。この場合、時間が早く経過したのは小林説のように「好ましい出会いやよい出来事」だからともいえるが、「ほどなく明け」には心情的にはまだ明けてほしくない・帰りたくない・飽き足らない気持ちが込められているようだ。むしろ表裏の二重構造としておきたい。

また「夏の夜」ではないが「夏の空」と詠じた、

夢にだに恋しき人を見るべきにほどなく明くる夏の空かな

（右兵衛督家歌合十一番右）

も同様であろう。これも恋歌（夏恋）だが、「夢にだに恋しき人を見る」というのは、実際には逢っていないからであろう。この場合は当然「好ましい出会いやよい出来事」とは無縁の例ということになる。逢わざる恋の例が含まれていることにも留意しておきたい。

『後撰集』にはもう一例、九九六番「うき世とは」歌の詞書に「よもすがら」（一晩中）に続いて「ほどなく明け」たので帰ったとあるので、日付変更時点を越えて午前三時になったと解釈してよさそうである（もちろんまだ明るくなってはいない）。これは恋の歌であるから、「後朝の別れ」であろう。歌に「憂き」とあることから、これも二重構造と見ておきたい。なお「うき世とは」歌の「天の戸あくる」を踏まえている歌が、

・夏の夜はほどなく明くるあまの戸をなにとてたたくくひななるらん

（後忠歌合八番左尾張君）

・夏の夜はたたくくひなのひまなさにほどなく明くるあまのとなれや

（六百番歌合二六番右経家）

に認められる。二首目の「水鶏」も鶏と同様に暁（後朝の別れ）の到来を告げている。

以上のように和歌の例の大半は、夏の短夜の時間経過の速さを詠じており、そのため「後朝の別れ」と結びついているのである。

四、物語・日記の用例検討

次に物語・日記の用例を検討してみたい。もっとも古い『うつほ物語』を見ると、

短き夜のほどなく明くる暁に、時鳥のほのかに声うちし、

（内侍のかみ巻167頁）

とある。これはもちろん「暁」が明けるのではなく、その前に「短き夜」とあるので、夏の短か夜が明けた結果、「暁」になったのだから、日付が変わったとしてよさそうである。それに続いて「時鳥」の声が聞こえているのも、暁（午前三時）を告げるのにふさわしい（鶏の代用）。ただしこれは男女の逢瀬ではなく、左大将正頼が節会のことを語っているところである。

なお「ほどなく明く」と「時鳥」の組み合わせは、『うつほ物語』の他に『和泉式部集続集』にも、

いかであはんと思ひつつ、としごろからうじて四月よひのほどにきて、ほどなく明けぬれば

とし月もありつるものを時鳥かたらひあへぬ夏の夜にしも

（一八二番）

と出ている。これも「後朝の別れ」の例である。「よひのほどにきて」いるのであれば暁までに時間はたっぷりあるはずだが、それにもかかわらず歌に「語らひあへぬ」物足らなさ（不満）が表出されているので、これも二重構造と見ておきたい。

続く『落窪物語』の例は、

御とのごもりぬ。ほどなく明けぬれば、出でたまふに、明け過ぎて人々騒がしければ、え出でたまはで帰り入りたまひて、臥したまひぬ。

（落窪物語80頁）

とある。これは道頼が落窪姫君のところから帰ろうとしている場面である。「御とのごもりぬ」とあっても眠っているわけではなく、二人で共寝をしているのである。それが「ほどなく明けぬれば」に直結しているので、これは満足云々よりも「省筆の手法」と見てよさそうである。もちろん「逢瀬」が省略されているわけだが、ここでは「明け過ぎ」た（明るくなった）ので帰るに帰れず、また姫君のところに戻っている。こうなると『落窪物語』の例こそは、物語における「後朝の別れ」の嚆矢ということになりそうだ。ただしここに男君の心情は描かれておらず、むしろ「明け過ぎ」て帰れなかったことこそがポイントになっている。

これに類する例が、小林氏も引用されている『とりかへばや物語』の、

更けにける夜の名残、ほどなく明けぬる心地すれば、出でたまはずなりぬ。

（494頁）

であろう。これは権中納言と女大将の「後朝の別れ」であるが、夜が更けてからの逢瀬だったので、権中納言は午前三時が過ぎても帰らず、やはりそのまま居座っている。そして「日高く御殿籠り起きて、女君の御さま見たてまつりたまへり」（494頁）と、明るい日の光で女君の姿を見ている。この場合は省筆にも

なっていない。

『とりかへばや物語』と対照的なのが『とはずがたり』の例である。

「三条京極、富小路のほどに、火出で来たり」と言ふほどに、かくてあるべきことならで、急ぎ参りぬ。さるほどに、短夜はほどなく明けゆけば、立ち帰るにも及ばず。明け放るるほどに、

（362頁）

これは二条のところに雪の曙が訪れた際、院の御所近くが火事になったと告げられたので、雪の曙は急いで院に参っている。そうこうしているうちに春の短夜は明けていったので、雪の曙は今更二条のところへは戻れなかった。そこで「明け放るるほど」に歌が送られてきたというものである。「明け放るるほど」は明るくなる意であろうから、その前の「ほどなく明け」は明るくなるのではなく、日付変更時点の午前三時になることになる。これも小林論には当てはまらない例である。

次に『源氏物語』正編の二例を見ておきたい。

らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。

（花宴巻357頁）

ほどなく明けゆくにやとおぼゆるに、ただここにしも、「宿直奏（とのゐまうし）さぶらふ」と声（こわ）づくるなり。またこのわたりに隠ろへたる近衛官（このゑつかさ）ぞあるべき、腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし、と大将は聞きたまふ。をかしきものからわづらはし。ここかしこ尋ね歩きて、「寅一つ」と申すなり。女君、

心からかたがた袖をぬらすかなあくとをしふる声につけても

とのたまふさま、はかなだちていとをかし。

嘆きつつわがよはかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく

静心なくて出でたまひぬ。夜深き暁月夜のえもいはず霧りわたれるに、いといたうやつれてふるまひなしたまへるしも、似るものなき御ありさまにて、承香殿の御兄弟の藤少将、藤壺より出でて月のすこし隈ある立蔀の下に立てりけるを知らで、過ぎたまひけんこそいとほしけれ、もどきこゆるやうもありなんかし。

（賢木巻105頁）

この二例は、共に源氏と朧月夜の密会後の「後朝の別れ」が描かれている場面である。[4]『源氏物語』は恋物語なので、本来なら逢瀬の場面を深く味わいたいところだが、肩透かしというか、二人の密会シーンは一切描かれておらず、単に「ほどなく明けゆく」という表現だけであっさり片付けられている（省筆）。

どうやら物語は、逢瀬のシーンを詳しく描く意図はなさそうである。というより朧月夜は朱雀帝後宮の女性なので、普通の逢瀬のようには書けなかったのであろう。なお賢木巻には「寅一つ」（午前三時）という時奏が出ており、日付変更時点であることがわかる。

花宴巻に「らうたし」が用いられていることに注目すると、『夜の寝覚』にも、

らうたくおぼすに、程なく明けぬべき夜も口惜しく、おぼし乱るるに、鶏もしばしば音なふに、寝も寝ず焦られ居たる人の、誰とだに知らぬ嘆かしさをいみじく言ひ思ひたるに、（32頁）

という例が見つかった。ここは中納言と寝覚の上の逢瀬である。鶏が暁の到来を告げて鳴いている。これはなるほど小林氏が説かれるように、二人の逢瀬が満足のいくものであったことを暗示していると読める。そのことは花宴巻の頭注二八に、「官能の時間が一瞬のうちに過ぎ去る」物語の省筆の手法と説明していることからも納得される。[5] この場合、「省筆の手法」であることには留意すべきであろう。「らうたく」とあるのは一般的な美的形容とは違って、男女が契りを結んだ際に、男の満足感・征服感として表出することがある。[6]

次に小林氏が引用されている『浜松中納言物語』には、

ほどなく明けぬる心地するに、「ここはいとつましきかたがたあるを、早う」とすすむるもことわりと思ひつつ、わりなきに、立ち出づべき心もせず。

わが世にもまだ知らざりしあかつきのかかる別れにまどひぬるかな（70頁）

とあって、和歌に「あかつきの別れ」が詠まれている。ここは中納言と唐后の逢瀬場面なので、源氏と同じように中納言も人目につかないように早々に帰らなければならなかった。「立ち出づべき心もせず」とあるのだから、ここも満足感よりも満ち足りない思いの方が強いはずである。

五、『源氏物語』宇治十帖の用例

『源氏物語』の正編にはこの二例しか用いられていないが、続編になると四例も用いられており、むしろ「ほどなく明く」は続編の特殊用法といえそうである。早速続編の例を見てみよう。まず総角巻に二例認められる。最初の例には、

逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬる心地して、（254頁）

とあって、秋の夜長にもかかわらず薫は夜が「ほどもなく明け」るように思っている。大君の部屋に入り込んだ薫だったが、大君には逃げられてしまい、中の君と無為に夜を過ごしているので、ここに満足感があろうはずもない。もちろん「後朝の別れ」の例でもなかった。同様の例は『浜松中納言物語』の、

宮も中納言もひとつ涙を流して、まもりあつかはせ給ふ。ほどなく明けゆく。（423頁）

も姫君を看病しているところなので、「後朝の別れ」とは無縁の例といえる。

もう一つの例は、

まどろむほどなく明かしたまふに、まだ夜深きほどの雪のけはひ、（総角巻335頁）

云々とある。ここは大君の死を悼む薫が、眠る暇もなく午前三時を迎えるところである。下に「夜深き」とあるので、「明く」は夜明けではなく真っ暗な暁で間違いあるまい。[7] いずれにしても総角巻の薫の二例は、共に「後朝の別れ」とは異なるものであり、当然満足感など得られてはいなかった。

なお「まどろむほどなく」という表現は『夜の寝覚』にも、

秋の夜だに人がらなるものなれば、まいて、春の夜の短さは、まどろむほどなく明けぬるなめり。（317頁）

と用いられている。ここは内大臣と寝覚の上の十年ぶりの逢瀬である。「秋の夜だに人がらなるものなれば」とは、前の総角巻にも用いられていたが、『古今集』の、

長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人がらの秋の夜なれば（六三六番凡河内躬恒）

を踏まえており（引歌）、秋の夜長でさえ逢う人次第で長く感じないこともあるのに、まして春の短夜なので、あっという間に時間が過ぎていることを強調している。[8] しかもここは巻三の巻末なので、省筆の手法としても機能していると見たい。

春の夜の短さについては『松浦宮物語』にも、

春の夜はいとどほどなき鳥の音を、なほ夢幻とも思ひ分かぬおぼつかなさをだに、いかではべるべきぞ。（104頁）

とある。「ほどなく明く」ではないものの、暁を告げる「ほどなき鳥の音」もバリエーションと見ることができそうだ。また短夜については『とはずがたり』に、

寝ぬに明けゆく短夜は、ほどなく明けゆく空になれば、（460頁）

と「寝ぬに明けゆく短夜」とある。これは『千載集』の、

ほととぎす待つは久しき夏の夜を寝ぬに明けぬと誰か言ひけむ（一四八番）

を引いたものであろう。また「ほどなく明く」のバリエーションとして、

結ぶほどなき短夜は明けゆく鐘の音すれば、「さのみ明け過ぎて、もて悩まるるも所せし」とて起き出でたまふが、

（とはずがたり２０５頁）

もあげておきたい。「明けゆく鐘」は暁の到来を告げる後夜の鐘である。ここでは「明け過ぎ」ることを心配してさっさと「起き出で」ている。

三つ目は匂宮が夕霧六の君のところへ通った際のことである。

秋の夜なれど、更けにしかばにや、ほどなく明けぬ。

（宿木巻４０６頁）

これは小林氏が引用されている例であるが、総角巻と同様に「秋の夜なれど」とある。この場合は「更けにしかば」とあって、匂宮は夕霧六の君のところへかなり遅くなってから（「更け」は子～丑の刻）訪れているので、午前三時まであまり時間がなかったのである（長居したくなかったのであろう）。この例は満足しているかどうか判断が難しい。むしろ省筆とみたい。同様に『小夜衣』でも、

夏の夜なればほどなく明けぬれば、いそぎ出でたまふを、

（40頁）

とあって、兵部卿宮は心ならずも大殿の姫君と結婚するが、午前三時になった途端、急いで退出している。「いそぎ」とあるので、男の愛情の薄さが表出している例である。

最後は東屋巻の、

ほどもなう明けぬる心地するに、鶏などは鳴かで、大路近き所におぼとれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物戴きたる者の鬼のやうなるぞかしと聞きたまふも、

（93頁）

である。これは薫と浮舟の逢瀬の後の「後朝の別れ」を描いた場面であり、逢瀬は省筆されているものの、「鶏などは鳴かで」以下、余計なことがくだくだと書き足されてはいないだろうか。薫は周りに気がそれている点、必ずしも浮舟に満足していないとも読めそうだ。

なお鶏鳴に関しては、前述の『夜の寝覚』でも「鶏もしばしば音なふに」（33頁）とあったし、「明く」はないものの、

ほどなく、鶏の音ももよほし顔に音なふに、

（夜の寝覚１３５頁）

でも、鶏の声が暁の到来を聴覚的に告げていると読める（「もよほし顔」は比喩）。

まとめ

以上、小林氏の御論を踏まえて、「ほどなく明く」という表現に注目し、その用例をあらためて調査・分析してきた。「ほどなく明く」は間もなく明ける、明けるまでに時間がない意味でいいのだが、その中でも男女の逢瀬や「後朝の別れ」に用いられている例を対象に考察してきた。その結果、辞書の説明とは異なり、

1、男女の逢瀬（共寝）と「後朝の別れ」にかかわる、ある意味では共寝のキーワードといえる例が多い。

2、男性側からの逢瀬についての満足感の表出がある。

ということが確認できた。これが基本であり、だからこそ心的時間として、たとえ短い時間でなくても短く感じるのであろう。これについては小林氏のいわれる通りであった。ついでながら、用例の多くは「夏の夜」「春の短か夜」だが、あえて「秋の夜」にしているものも見られた。

もちろん逢瀬の満足は即ち別れの辛さにもつながるので、表裏の二重構造としてとらえてみたい。また『源氏物語』宇治十帖ではそれを逆手にとって、むしろ後朝でないケースや満足感を味わっていない例として描かれているので、

3、疑似逢瀬など満足感のない例もある。

を加えておきたい。これは「ほどなく明く」の例を網羅することで見えてきた新しい用法である。それにもう一つ、

4、逢瀬の描写を省筆する技法として機能している。

をあげておきたい。これは時間表現からは離れるものの、物語においてはかなり重要な手法である。

その前提として再度繰り返すが、「明く」の解釈が大きな問題であった。従来は夜明け・明るくなる時間とされていたが、それでは「後朝の別れ」の時間としては遅すぎるので、小林氏の説かれている午前三時（「後朝の別れ」の時刻）を基本として考えるべきである。その上で『源氏物語』は、「ほどなく明く」の用法をさらに進化させていたと結論づけたい。

〔注〕

（1）小林賢章氏『「暁」の謎を解く―平安人の時間表現』（角川選書）平成25年3月。小林氏の研究の核は、「午前三時」が日付変更時点になっていることである。その意味では「午前三時の研究」ともいえる。

（2）小林賢章氏「『浜松中納言』の時間表現」同志社女子大学学術研究年報65・平成26年12月。小林氏も賢木巻の例に触れられていたはずだが、

何故かこの論文ではそのことに言及されていない。

（3）小林氏は「時間表現」という論文のタイトルでわかるように、「ほどなく明く」だけでなく「明くるも知らで」・「後夜」・「明方」・「入相の鐘」なども一緒に論じられているので、「ほどなく明く」への言及はその分だけ少なくなっている。

（4）これについては吉海「『源氏物語』賢木巻における朧月夜との「暁の別れ」」『源氏物語』の時間表現』（新典社選書）令和4年7月で詳しく論じているので参照していただきたい。

（5）「省筆」に関しては、田村隆氏『省筆論―「書かず」と書くこと』（東京大学出版会）平成29年7月参照。「書かず」とはないが「ほどなく明く」も省筆の手法の一つと考えてよさそうである。

（6）吉海「「らうたげ」は男の目線」『源氏物語』の特殊表現』（新典社）平成29年2月

（7）吉海「後朝の時間帯「夜深し」」『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院）平成28年12月

（8）時代は下るが、御伽草子『文正草子』にも、

名にしほふ秋の夜なれども、程なく明けぬれば、たがひに悲しくおぼしめして、中将殿、かくなん、

恋ひ恋ひてあひ見し夜半の短きはまた来んことの尽きも果てずや

姫君、うち恥かしげにて、

数ならぬ憂き身は夜半の短きも思ひもあへずしののめの空

（新編全集室町物語草子72頁）

と逢瀬の描写に継承されている。「名にしほふ秋の夜」が「ほどなく明け」たことを、歌で「夜半の短き」と詠んでいるのは、小林氏の結論通りである。付け加えるならば、逢瀬の満足が反転して「後朝の別れ」の悲しみを増すという二重構造になっていることも忘れてはなるまい。

〔付記〕

「ほどなく明く」に準じるものとして、『紫式部日記』の土御門邸行幸（皇子誕生）の中に、

宮の御かたに入らせたまひてほどもなきに、「夜いたうふけぬ。御輿寄す」とののしれば、出でさせたまひぬ。またのあしたに、内裏の御使、朝霧もはれぬにまゐれり。（159頁）

とあることを紹介しておきたい。これは皇子を出産した彰子のところに一条天皇が行幸されている記事である。ここに「明く」は用いられていないものの、「夜いたうふけぬ」は暁になる直前である。それに続いて「またのあした」に勅使が文を届けているとあるのは省筆でもあろうし、いかにも「後朝」を髣髴させる描き方である。もちろんこれも満ち足りている逢瀬の例とはいえそうもない。